



(一社)日本ボーイスカウト神奈川連盟 川崎スカウトクラブ

目次

遙かなる時を越えて	百木幹雄	1	野営章と炊事章の取得	小川芳郎	2
寂しい右袖	井村修治	3	ジョン万次郎は富士スカウト稲葉正明		3, 5
心の技能章を磨こう	百木幹雄	5	今南極で何が起きているか	谷本通安	5, 6
ジャンボリー物語	渡部 公	7	活動報告・編集後記		8

〔遙かなる時を越えて〕

(思い出のハーバートップ)

百木 幹雄

虫たちの囁きが聞こえる待望の秋を迎えました。長く続いた猛暑、熱中症の警戒から足も進まずテレビでも「高齢者は外出を控えて」と呼びかけるなど毎日、天気予報との対面でした。

健康について言えばB-P「ベーデン・パウエル」のラストメッセージを実行することでしょうか。

少年時代に強い身体を作り、大人になった時、社会に役立つ人となり楽しい人生を歩むことにとあります。自主、自律と創造性を持って刻々と変わる社会の動きの早さにどう対応して行くのか、老年などと言わず、まだまだと自覚し勇気と自信を持って楽しく活動したいものです。

そして今、高校の卒業アルバムのクラス毎の寄せ書きに「身体を強くし心を健やかに徳を養います」(ちかい-3)と大きく書いたことを思い出しました。

さて、1956年(昭和31年)夏、第1回日本ジャンボリーが開催されました。全国から25,000名のボーイスカウトが集い高原での野営は快適でアメリカをはじめ諸外国のスカウトが参加して、最高の盛り上がりを感じております。

中でも、より強く残っているのはハーバートップの存在です。横浜地区の精鋭年長スカウトが、梅田?隊長のもと規律ある活動・行動するユニフォーム姿

の美しさ、私と同年代(高2)であり、他地区を知らない中ハーバートップの輝く姿を見た時「これだ」と感じました。

故近江隊長と共に川崎地区のゴールデンアックス(G.A.T.C)として取り組んだ際、ハーバートップを理想形に捉えましたが私の中では程遠いものでした。

そこに近づくには少年時代に培われた体験や能力を展開しながら年長のスカウティングを楽しく進めるのか?など考えました。

個人が捉えるボーイスカウトの在り方、受験と共にある意識の持ち方など全国に名だたる「横浜ハーバートップ」はどのように結隊され育成されたのか、既に隊員達は80代半ば、遠く霞むときでもあります。スカウトが楽しく苦難をのり越え、真理と知識と言われるスカウトの目を見開いて経験・体験を共同認識し観察力と自身の行動力、そして何より深い情熱を持ってスカウトの道を歩む時、地域社会への公共奉仕等、貢献しうる存在となり豊かな人生の形成に向けボーイスカウトの体験が大きく花開くことになるでしょう。



第42号に引き続き「技能章」に関わる特集第2弾ですが、様々な思いと思い出があります。

【野営章と炊事章の取得】

小川 芳郎



現在の野営章では入団以来通算10夜以上のキャンプ参加が求められている。百木さんとは毎年同じキャンプへ行ったことの思い出を折に触れては語り合うので、相当数の野営日数のはずだと認識があった。しかし、今回自分たちの頃はどのくらいのキャンプをしたのか調べてみた。自分の所持している野営記念ワッペンが開催期間と、百木さんの機関誌「杖」へ投稿された数々のキャンプの思い出の中の野営日数を参考に算出した。すると、野営章の面接を受ける前までに16夜21日のキャンプをしたことになった。(内訳は4泊5日のキャンプが3回と2泊3日のキャンプが2回である。)入団以来6年間であるが、思っていたほどの野営日数ではなかった気がする。

初めの頃の野営状況を思い出してみよう。テント設営では設営地の選定、寝床の整地、テント張り、ペグ打ち、グラウンドシートを敷いた。テントの屋根根端に沿って排水用の溝を掘り、掘った土をソドクロスの上に盛って、雨が入らないようにした。

炊事は小学生低学年から家の風呂焚きのため、マサカリやナタで薪を割って釜へくべ、マッチで新聞紙に火をつけ、火吹き竹や団扇で風を送った。だから、キャンプでの火おこしはそれ程苦労なくできた。ただ、風が強いときにマッチ2本以内で着火させるのは工夫が必要だった。風防のためにハットをかざしたり、班員数人が取り囲むチームワークなども必要とした。飯盒炊飯も初めてのキャンプではぶっつけ本番だった。水の分量も大まかで、吹きこぼれの

後、焦げる匂いがして、あわてて火から下すと、シニアが来て、飯盒をひっ繰り返してまだ熱い底を薪でたたいたので、底がぼこぼこになってしまった。蒸らした後に蓋を開けて飯をスプーンで混ぜると、黒く厚いおこげが出来ている始末だった。マグロフレクのおかずと灰の浮いた味噌汁の食事だった。

こうして野営を重ねる度に全てが上達していった。野営章の合格証は、昭和33年6月8日小清水黄二川崎地区委員長、高田孝地区コミッショナー、島田武三進歩委員長の承認がある。

ちなみに、水泳章は入団以来3年目、救急章は4年目、野営章は6年目、炊事章は7年目であった。

「BS 日本連盟100周年記念ムービーに出てくる軽井沢日本ジャンボリー参加、川崎第5団若鮎隊キャンプサイト」



[技能章：寂しい右袖]

井村 修治

僕のシニアスカウト時代の隊長は富士章取得第一号の松行さんだ。

進学などを含めて何かとよく相談に乗って頂いた。

一方、年長技能章など、肝心の進歩課程には固執していなかったようで、これ幸いに僕は好き放題の高校生なりのスカウト生活を送らせて頂いた。

今もって付き合いのある同年の仲間も一緒に、大した章を取得していない。というか、隊付としてBS隊に所属する立場でもあり、年何回かのシニアキャンプもふたを開ければ、何年か前のグリーンバーキャンプと同じメンバーなのだ。

ややもするとシニア所属の観念自体が希薄になりがちだった。当時、30年代後半のボーイスカウトは絶頂期にあり、どの団も分団で派生した同じルーツの兄弟団を3～4団は抱えていたと思う。この同学年20名程のうちに突如として進級に目覚めた者が一人位はいて、腕にはもはや付けるスペースがなく、専用のタスキに重くないかと傍目に心配するほど多量の技能章を縫い付けていた。

同年齢の目でも、「これらのスカウト達の所作はみな機敏で清々しかった。」という印象が残っている。やはり優秀だったのだろう。

年長技能章は四角、BS対象の少年技能章は丸のデザインだった。僕はBS時代もSSと同じく、今考えると不思議だが、まったく進級に関心がなかった。とは言えさすがに、右袖が軽すぎる。

やはり体裁を考えて少年技能章の4～5個はと常々思っていた。中学2年の秋だったと思う、ちょうど日赤救急章の講習会があり、デンマザー達も参加するとの事である。一度この日赤救急章を付けたスカウトを見かけた(右袖に装着可)が、でっかくてすごくカッコいい。

僕には少年菊章取得に必要な少年技能賞5個分に匹敵、いやそれ以上の見栄えの良さに思えた。

さらに、少年、年長救急章は共に、この日赤救急章取得で自動的に得ることができる。

一石三鳥とはこの事で、子供心にも費用対効果が

非常に高く、能率的と思われた。

それでも最年少受講者として、毎週土曜日に4回ほど通う必要があり、考査もあった。

レベルもそれなりに高かった。

幸い合格したので、さっそくワッペンを取得を図ったが、どこで手に入れるのか分からない。

隅田川沿いの日連本部に行き、渋谷の日赤本部にも行ったが直ぐには手に入れられなかった。

詳細は忘れたがようやく手にした日赤救急章ワッペンをそれでも半年ぐらいいは付けていた。

ところがとにかく目立つし、本来の救急担当を誇らしげに誇示するにはまだまだ未熟なことに気が付き、とうとう外してしまった。

その後は相も変わらず、数少ない技能章が貧そながら袖を飾る制服の着用であった。



[ジョン万次郎は富士スカウトの資格あり]

稲葉 正明

土佐国幡多郡(現在の高知県土佐清水市)の漁師の家に生まれた万次郎は1841年(天保2年)1月、14歳の時に出漁中、暴風のために操船できないまま、鳥島に漂着し、4か月後にアメリカの捕鯨船 John Howland 号に救助された。捕鯨船の Whitfield 船長は万次郎の資質を見抜き、航海中にアメリカへの移住を誘い、1843年5月(16歳)マサチューセッツ州 New Bedford に上陸した。万次郎は親切なホストファミリーに支えられ、航海専門学校に通いながら、樽屋で住込み奉公もこなして青春期を過ごした。

航海専門学校を優秀な成績で卒業後、1846年(19歳)に Franklin 号で太平洋、大西洋、インド洋を巡る3年4カ月の捕鯨に出ることになった。

万次郎の航海術や船上での調整能力は他の船員達

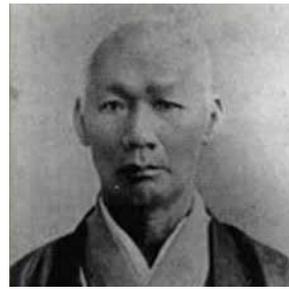
に認められ、1848年(21歳)には副船長に選ばれるほどの存在になっていた。ところが、航海を無事終えてNew Bedfordに戻った後、万次郎はカリフォルニアの金鉱に向かった。日本への帰国資金を手に入れるためである。一攫千金を狙う猛者達に囲まれながら、護身用の拳銃を携え、4か月働き、600ドルを手に入れると、そのまま山を下り、サンフランシスコからハワイに向かう船に乗った。

ハワイ到着後、綿密な帰国計画を練った。直接本土に上陸すると、罪人として捕縛されるリスクがあったので、当時独立国でありながら薩摩藩の支配を受けていた琉球(沖縄)に上陸することにした。

どのように情報を集め、このような分析をしたのか?この時、万次郎は23歳だった。

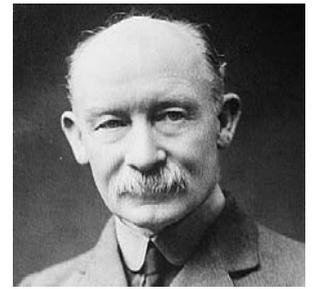
万次郎のハワイ滞在中には牧師達の支援もあった。現地の新聞には、土佐沖で遭難した時の経緯や帰国するために必要な物資の寄付を募る記事も掲載されている。万次郎はハワイで小舟と船具一式を125ドルで手に入れると、上海に向かうSalah Boyd号に乗り、1851年2月に琉球の沖合で小舟とともに下船した。翌日になって沖縄本島に無事に着くことができた。ただし、その後、琉球国、薩摩藩、長崎奉行所、土佐藩に合計2年近くの取り調べを受けなければならなかった。万次郎は“Oh My God”と呟いたであろうか?取り調べが万次郎に幸いしたこともある。

万次郎が持つ海外の情報、豊富な知識は幕府にも知られることになり、1853年26歳で江戸幕府の直参旗本に取り立てられ、中濱万次郎と名乗るほどになっているからである。この年にペリー提督の艦隊が浦賀に初めてその姿を現したが、その翌年、1854年3月に日米和親条約の交渉が行われた時には、英語力に優れた万次郎を通訳として出席させようとする動きがあったが、アメリカに有利な計らいをするのではないかと水戸藩が強く反対したため、万次郎が交渉の場に姿を現すことはなかった。さすがは攘夷派の水戸藩だが、複数の通訳を同席させれば、万次郎がどちらかに有利な通訳をすることは防げたはずである。では、何故反対したのか?裏付けになるような記録があるかも知れないが、アメリカ人であ



往年のジョン万次郎

(1827~1898)



Baden Powell 卿

(1857~1941)

れば英語を使わずに意思疎通ができることを、幕府の上役や水戸藩は心配していたのではないかと、スカウトクラブ・メンバーであれば想像してみたくなる。

(1) アメリカ側を代表するペリー提督は、手旗やモールス信号は基本知識として身に付けていたはずである。万次郎も航海専門学校の必修科目として習熟していた。従って、その気にさえなればモールス信号を応用したやり取りは容易にできる。

(2) 1853年に初めてペリー提督の艦隊4隻が浦賀沖に投錨した際、夜間の船艦隊どうしの連絡は、暗号化したモールス信号を光の点滅により授受していたはずである。(3) 艦隊の監視役からの報告を受けて、光の点滅のような手段を取れば、まばたきの長短や首をゆするような仕草を工夫するだけで、幕府の通訳や他の出席者に気づかれずに、意思疎通することは容易である、と、幕府や水戸藩の関係者が判断していた可能性が高い。想像を広げてみると、万次郎はモールスも手旗もできるのだから信号章は問題なし。遭難した鳥島での生活からは、野営章や炊事章の条件もクリア。航海専門学校での履修により、沿岸視察章、天文章、測候章、救急章も単位取得可。そして、樽屋での住込み経験により、木工章に匹敵する技量を身につけているので免許皆伝。リーダーシップ章は副船長として実証済み、最後はカリフォルニアの移る前に、紙に書いた自作の英詩にキンポウゲの花を添えて女友達の家の入口に置いた事実をもとに、世界友情章&通訳章はOKのハンコが押される。特筆されるのは、帰国に向けた壮大なプロジェクトの立案と実行である。技能章と合わせて、ジョン万次郎に富士スカウトの資格があった。

だが、スカウティング活動は始まっていなかった。1857年、万次郎が30歳で幕府の軍艦操練所教授となった年にBaden Powell 卿が生まれている。

【心の技能章を磨こう】

百木 幹雄

その昔、市立南河原小学校で川崎地区の「技能章勉強会」が行われました。参加者は各団より取得を目指すスカウト20名、進歩委員会より地区野営行事担当としてスカウトに何か話をして欲しいとの依頼があり、年長時代の課題として体験した奥多摩での個人野営の経験を話しました。『自分しか頼れない、自分を頼ることなど炊事、非常食のかりんとう、現在のように即席めんなどはなく通信手段もない時、自分の野営をどうするか等、主に野営章中心となりましたが、最後に私のお願いとして「心の技能章を磨いて欲しい」と話しました。スカウトは？の状態でしたが一つ一つの技能章取得に真剣に対峙するとき、多くの難しさを感じながら取得時の自信、挑戦した努力、を通じ腕や胸（技能帯）に達成感を持って外部の人に自信と勇気を示せるものです。私の言う「心の技能章」は外には見えないが自身の中で数多く輝いている。以前より誰のため、何のためのスカウティングかと言われていますが「心の技能章」は皆さんの内面に輝かして欲しいと待っています。健康で楽しい人生の喜びへつなげて下さい…。』と。次の世代をになうスカウトが何を考え、どのように行動し伝えて行くのかを今後も注視したい。

（当時のスカウトも70歳台、私の25歳時の思い出として…。）

【南極大陸に何が起きているか】

谷本 通安

大陸を覆うのは地球最大の氷の塊「氷床」蓄積された雪が氷となり流れるのが氷河で、氷床は氷河の内、規模の大きなもので、南極とグリーンランドに存在し、一応面積が5万平方キロ以上という目安があり、南極は1400万平方キロで日本国土の37倍、体積は氷河全体の約9割に相当する。又、氷の厚さ

は概ね2キロで場所によっては4キロを超えるようだ。もし全てが融ければ地球の「海水準」（陸地に対する海水面の高さ）は約58m上昇する。

この巨大な南極氷床が、これ迄考えているよりも急激な変化を遂げているようで、少し位温暖化が進んでも氷床が融け始めることなど無いだろうと思っているだろうが。現に2001年の国連の気候変動に関する政府間パネル・IPCCの報告書では、今後気温上昇に伴って降雪量が増え氷が増加して海水準の上昇を抑える可能性があると言われていたが、2021年に公開された(IPCC)報告書では21世紀までに海水準が2m（2050年迄に5mに迫る）近く上昇の可能性も完全に否定できないという予測に改められた。



最大の異変は氷と海の境界で起きており、海によって融かされる氷の量が増加し海へと切り離される氷山の量が増えた結果、南極の氷が急速に減少していることが明らかになった。その背景には気候変動に影響を受けた海の変化で、巨大な氷床が融解すれば影響は地球全体に及び海水準が上昇するだけではなく海水の塩分と密度が変化して海洋循環が滞り、地球全体への気候と生態系の環境のインパクトは計り知れないことが窺われる。

IPCCの報告書では「人間活動」の影響で過去に例のない気候変動が起きていると、その原因は化石燃料の燃焼か土地利用で、大気、海洋、陸域が温暖化したことに疑う余地はなく明瞭であると記されているのが印象的である。更に絶えまなく報じられる気温上昇だけでなく異常気象と自然災害（豪雨・熱波・旱魃）など極端な数々が人間の活動によって引き起こされているが、一方で嬉しいニュースもある。

それはノーベル物理学賞が気候変動の研究者真鍋淑郎氏に、又共同で受賞したクラウド・ハッセルマン氏は「人間活動と気候変動の関係性」を明らかにした。地球科学がノーベル賞の対象になるのは非常に珍しく、それは即ち気候変動が人類にとって最も

緊急かつ重要な問題であるという強い訴えかけで、温暖化対策を求める声は強まっていることは否めず社会への危機感は薄れることはない。

最近耳にする「二酸化炭素排出ネット・ゼロ」といった対策の有効性も含めて、将来の気候変動を抑えられるか、「将来の気候は急な坂を転がり落ちており、もうその変化を喰いとめることは出来ない。只その変化に少しでもブレーキを掛けることは可能であり、それには我々、社会全体の真剣な対策が必要不可欠である」その大きな転換点にいることを忘れてはならない。

[未来へより良い環境を次世代へ送ろう!]

[近江廣之氏を偲ぶ会]

近江さんが他界されてから丁度1年になりました。

かつて所属されていた第56団有志を中心に「偲ぶ会」を行いたいと発起されて、川崎地区協議会、賛助会、スカウトクラブから、実行委員を出して準備会議を行い各方面の方々に参加を呼び掛けました。

7月8日百木さんのご尽力により太陽第2幼稚園を会場に開催されて、神奈川連盟関係者15名をはじめ、川崎地区内上記の各団体、有志の方80余名の参加者が集い、近江さんの在りし日を偲びました。

濱田第56団団委員長が、近江隊長・スカウト時代の様子から「偲ぶ会」の開催経過の後、近江さんと交流があった方々の思い出話、エピソード等が披露され、あり在りし日の近江さんの姿を改めて思い出されました。会の最後に、百木さんの指揮により“永遠のスカウト”を合唱して散会しました。



[ジャンボリー物語]

「第17回世界ジャンボリー」

渡部 公

今夏、第25回世界ジャンボリーが韓国・全羅北道セマングムで開催されましたが、第17回世界ジャンボリーは平成3年(1991)8月7日～16日、韓国・江原道雪岳山(ソクサン)国立公園で開催されました。

日本からは隣国で近い事もあり派遣隊はスタッフを含めて2,200名が参加しました。神奈川連盟からは5ヶ隊200名で、私が担当した隊は第3分団第16隊で指導者4名スカウト36名の合計40名でした。

スカウトは県央地区20名、横須賀地区9名川崎地区7名で4ヶ班で編成、リーダーは川崎地区隊長・上班2名、県央地区副長2名でした。

隊としてチームワークを重視して隊集会・事前キャンプをそれぞれ2回実施して臨みました。

成田から韓国・金浦空港へ空港からソウル市内の宿舎まで日本派遣隊のバスはパトカーに先導されてノンストップで走りビックリ、国賓待遇でした。

翌日、ジャンボリー会場へ向かったのも同様で、途中休憩がありましたが5時間ノンストップで走りました。会場は朝鮮半島を2分する北緯38度線よ

り北側で、キャンプサイトから国境の鉄条網が見えてパトロール中の兵士も時々見える様な場所でした。

韓国は1988年ソウルオリンピックを開催して成功しているので、それに続く世界大会としてジャンボリーを開催して国威発揚をねらいとしたとも言われていました。野営用具は日本連盟で用意してある



316 隊ゲート

筈でしたが宿泊テントが間に合わず、キャンプ初日は食道フライで40名が雑魚寝でした。2日目から全員で設営に汗を流して翌日からのプログラムに備えましたが、設営中に1名がギックリ腰になり本部の病院に入院する騒ぎがあり、副長がつきっきりで対応しました。

睡眠不足による腹痛・頭痛者が数名出たりで

キャンプ生活に体が慣れるまで大変でした。

プログラムが開始されると皆元気が出てきてスカウトは自分が楽しんできた自慢話をする者が多くなり、夕食は友達になった外国人スカウトを連れてきて一緒に食べるようになりました。メニューは共通なのでどこで食べても同じですが毎晩これが続きました。我が隊のスカウトもどこかの国へ招待されて行くので同じことでした。ある時はスコットランド隊へ行ったスカウトが、タータンチェックのスカー



トをはいて帰ってきて、皆なで大爆笑でした。

何と交換したかは分からずじまいでしたが…。

隊長の仕事は対外的な仕事があり、期間中に各国スタッフを招待した“Japan day”の昼食会があり、ホスト国として受付を担当したり、中でボーイの仕事をした事もありました。サブキャンプサイトの定例会議が数回あり、運営する韓国連盟スタッフが結構厳しかったのですが、我々に付いた通訳は九州大学大学院の留学経験者で福岡のホストファミリーはなんと私の知り合いの方だったこともあり話がはずみ、何かと便宜を図ってもらいました。

残念だったのは「東京音頭」を練習して行って現地で全員が踊る計画が、連絡ミスで踊る機会がなくなった事でした。突発事件は色々ありましたが幸いにも、10日間のキャンプ生活が無事終わりました。

ソウル市内に戻り2日間市内見物でリラックスして全員元気に成田空港に帰ってきました。



何より参加者全員が貴重な経験を積み、無事に帰国することが出来て、リーダー4人で握手をして喜び合いました。

後日、隊長として嬉しかった事がありました。

世界ジャンボリーに参加したスカウト2名が「世界ジャンボリーに参加して」のテーマで「富士スカウト章」を取得したとの事でした。

平成9年(1997)8月開催された「第11回神奈川キャンボリー」にリーダーで参加した県央地区前スカウトが、川崎地区の私を訪ねてきて報告と共に「お礼を言いたかった」と言って帰りました。

感激でしたね！

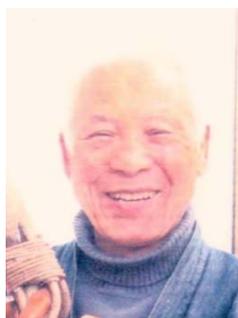
[大先輩からの便り]

広報部

昨年、令和4年(2022)3月川崎地区創立70周年記念誌を発行しました。

旧日本鋼管隊・川崎地区役員としても活躍された、依田功氏(広島県福山市在住)より編集を担当された杉浦正明氏宛の手紙を「杖」に提供されました。

過去の川崎地区の写真や新聞記事が沢山送られてありますが顔写真のみ紹介します。全てをご覧になる方は渡部にご連絡ください。



依田さんは90歳になられましたがお元気で毎朝5時から2時間、歩いて健康維持に努めています。午後からはグランドゴルフ、趣味で陶芸・木工を楽しまれている他に、「福山地区認知症のひとと家族の会」福山地区副代表、立命館大学がまとめ役の、「全国男性介護者会」福山地区代表と地域活動を続けていらっしゃいます。BSの経験が生きているとも書かれています。

活動あれこれ

[多摩川美化活動奉仕]

奉仕部

今年は、多摩区・麻生区が中央会場になり6月4日「二ヶ領・宿河原堰」に集合して当クラブから5名が参加しました。福田川崎市長も参加されて「私はボーイスカウトで小学4年生から多摩川清掃活動に参加している」と挨拶されていました。

好天気の中、多摩川のゴミ拾いをして解散しました。



「日清オイリオグループ(株)横浜磯子工場」見学会

行事部

日清オイリオ(株)は我が国で最大手の食用油メーカーであり、横浜磯子工場は其中でも最大です。

食用油、植物性たんぱく質、化粧品原料等を製造しています。工場見学は団体のみ受付ていましたが、夏休み期間中は子供中心のため8月4日、30日と2回に分けての見学となりました。

前後に「三溪園」見学を予定していましたが、猛暑のため見合わせて次の機会にしました。



会員募集

川崎スカウトクラブはスカウトOBが多く活動していますが、それ以外の方も参加しています。どなたでも、お気軽にご連絡ください。

事務局 045-973-8580

Ciao.14125@kce.biglobe.ne.jp 渡部 公

編集後記

・前号(第42号)に続けて「技能章」に関わるテーマの第2弾になりました。それぞれ思いがあります。

・今夏、姉妹都市ボルチモア市から少人数でしたが来川しました。コロナウィルス禍と上手に付き合っで以前の状態に戻ることを期待しています。

・次号第44号は2024年1月20日発行予定です。内容は問いませんので、ご寄稿をお願いします。

・タイトル写真はエゴノキ科エゴノキの実です。果皮がえぐい(えごい)ことに由来しています。すりつぶすと石鱈の代わりにもなる実です。(渡部)